

19世紀末におけるフランス人の日本研究に関する考察

—André Bellessort の “Les Journées et Nuit Japonaises” を中心に—

飯 田 史 也

(第4部教育科)

(平成4年9月9日受理)

I. はじめに

小林善彦氏によると, 16世紀以降約250年間にわたってヨーロッパから来日した者たちの著作は, 日本人に関して同じ批評を繰り返しているという。例えばそれは, 知的好奇心が強い; 仕事に熱心である; 清潔好きである; 親切で礼儀正しい; 誇り高く侮辱を我慢できない; 心の中を外に見せない; 復讐心が強く, 陰険で残忍であるといった指摘に表れているという¹⁾。氏はこうした記述が繰り返される理由として, 鎖国以前に来日したキリスト教宣教師ら観察者達の眼が確かだったことをあげ, かれらの記述が当時の日本人を正確に描写したのもだったためではないかと仮定する。また鎖国前の来日者が日本人をより正確に観察できた理由として (1)彼らの日本滞在期間が長かったこと (2)彼らが布教のためあらゆる階層の日本人と積極的に交流したこと (3)鎖国以前には外国人はかなりの行動の自由を持ち, また自由に国内を旅行できたことによるのではないかと仮定している。そして開国直後來日したヨーロッパ人にはこれらの要件が欠け, 鎖国以前の渡日者の著作を研究することで, 日本に対する一定のステレオタイプを形づくっていたものと指摘する。

日本開国後の1873年には第一回国際東洋学会議がパリで開催され, 日本研究部会では多くの研究成果が発表された²⁾。また幕末・明治期からは駐日外交官や御雇い外国人など, 様々な外国人が来日し, 彼らの何人かは, すぐれた日本研究書を著した。明治中期になると, 鉄道などの交通機関が全国的に整備され, 駐日外国人の国内旅行も容易になった³⁾。駐日外国人の日本研究は, かつてのキリスト教宣教師が行なったような, 例えば布教などを目的とした手段的なもののほかに, 日本研究それ自体を目的とするものも見られるようになった。

アンドレ・ベルソール (André Bellessort)⁴⁾は

1898年に3ヶ月をかけて日本国内を旅行し, 多くの人物と交流を持ったという点でとくに小林氏のあげた(2)と(3)の要件を充足しているように思われる。本稿で取り上げるベルソールの著作『日本の昼と夜』(*Les Journées et Nuit Japonaises*)に記載された旅行のルートは, 静岡—名古屋—京都—奈良—大阪—広島—長崎—鹿児島—熊本—大牟田—東京—仙台—青森—函館—苫小牧—小樽—函館である。ベルソールはこの旅行で, 多くの日本人や在日外国人と接触し, 日本をとりまく様々な事象や問題について彼らから活発に情報を収集しているのである。

ベルソールが日本に滞在した1897—98年は, 日清戦争後数年を経ており, 日本が開国後導入した西洋の文物がかなりの定着を見た頃ではあったが, なお国内では東西の価値観がせめぎあい, 日本人自身が異文化の葛藤を繰り返しているときであった。ベルソールの言質は, 日本の欧化政策を絶対視することで, 日本人の欧化の程度を検証しようとするようなものではない。ベルソールの記述で特徴的なのは, 単に日本の伝統的な事象や日本人の特性を紹介するだけではなく, 西洋と東洋の文化が接触し, 葛藤し, 融合する異文化接触の現場として日本を眺めていることである。そしてベルソールは, 日本旅行中に遭遇した事件や日本人から聞いたエピソードから, 独自の考察を行なっていく。

ベルソールの『日本の昼と夜』は, 永井荷風が日記『断腸亭日乗』の中で1936年3月にこれを読んだと記述している⁵⁾が, 現在でも日本ではあまり知られていない書籍の一つである。また現在ではすでに大久保昭男氏による訳⁶⁾があるが, これまでその記述内容自体を考察した研究はなされていない。本稿では, 今回入手した原本⁷⁾をもとに, ベルソールの記述を日欧の異文化接触の視点から検証してみたい。

ANDRÉ BELLESSERT

LES JOURNÉES

ET

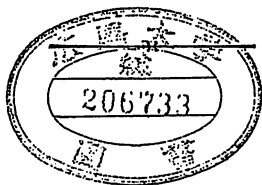
LES NUITS JAPONAISES

A MONSIEUR JULES HARMAND

MINISTRE PLÉNIPOTENTIAIRE DE FRANCE AU JAPON

*en souvenir de son bienveillant accueil
et de notre voyage au Yesso*

A. B.



PARIS

LIBRAIRIE ACADEMIQUE DIDIER

PERRIN ET C^{ie}, LIBRAIRES-ÉDITEURS

35, QUAI DES GRANDS-AUGUSTINS. 35

1926

Tous droits réservés

写真1 『日本の昼と夜』の表紙と内表紙

II. 日本人の魂 (âmes) と宗教

『日本の昼と夜』の第1章は、「京都への途上で」(Sur la route de Kyôto)と題されている。この章では、ベルソールの見聞したいいくつかのできごとが述べられるが、主に展開されているのは日本人の魂 (âmes) と宗教観である。ここでは3つのエピソード (épisode) が紹介される。

その一つは、一人の青年が長く私淑してきた企業家が重病となり、青年はその時になってその企業家が実父殺しの宿敵だったことを知るが、彼の髪を切り取るだけで仇討ちとし、その企業家が亡くなるまで世話をし、彼の死後その髪を実父の墓に供えたというものである。ベルソールは先週埋葬されたというその事業家の空き家を見かけ、知人の日本人からその話を聞いたとしているが、この話自体がかなり出来すぎており、ベルソールの耳に入る前に脚色されたきらいがある。

二つめは、ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) からの引用である。それは、ある日収穫を終えた農夫が、岬から巨大な津波が村へむかっ

て押し寄せてきているのに気づき、収穫したばかりの稲と穀倉に火を付けて、村人に知らせた。農夫のおかげで難を逃れた村人たちは、彼のために神社を建立したというものである。これは、紀州広村の濱口梧陵が、安政元年の津波の際に村民を救ったという事件を、ハーンが物語り風にまとめたものである。ハーンは、村民が神社を建てる経緯を、次のように記述していた。

村の人達は、自分たちが濱口五兵衛の恩をうけたことをけっして忘れなかった。かれらは、五兵衛老人を元のように裕福にしてやることこそできなかったけれども、(中略) そうかといって、五兵衛老人に対する村の連中の敬意のしるしとしては、なにか物を贈るぐらいのことで満足できなかったにちがいない。なぜというのに、村の連中は五兵衛老人の心魂を神と信じこんでいたのだから。じじつ、かれらは五兵衛老人のことを神様だといって、公然と吹聴していたし、のちには「濱口大明神」と呼んでいたくらいであった。(中略)

ほどなく村が旧に復した時、村の人たちは、五兵衛老人のために、一字の堂を建てて、その

堂の正面の欄間に、老人の名前を金文字で書いた扁額をかかげた。そして、村の衆一同で、祈念と供物をもって、堂に参拝をしたのである⁸⁾。

(括弧内引用者 以下同じ)

ハーンのこの記述に対してベルソールは、

私は、日々の生活のなかで人々がこの人物を神として敬っていたとは考えない。しかしこの土地の子供たちは、この農夫がいつからか、実際に神の精神を受肉した(incarné l'esprit d'un Dieu)ことを知っていたのだ。(p.18)

(和訳引用者 括弧内に原本のページを付する。以下同じ)

という。そしてベルソールはこれら二つの逸話から、

日本では、神は道の上を歩いており、屋根の下に住んでいる。日本人が、自ら光栄に思う行動のすべては、神の存在の眼に見える煌めきにすぎないのだ。(p.19)

と説明する。

三つめは、自分の家が火災になったある学校教師が、他のものは手に取らず、天皇の「御真影」だけを抱き締めて脱出し、人々の称賛を得たというものである。佐藤秀夫氏は、1923年の「関東大震災」の際に神奈川県酒匂の小学校である女教師が「御真影」を守ろうとして殉死した事件をあげ、これが当時の新聞報道によって大々的に取り上げられ、昭和以降いわゆる「学校美談」としてひとり歩きを始めたことを紹介している⁹⁾。ベルソールが名古屋でこの話を聞いたのは、「関東大震災」の「美談」より約30年ちかく昔のことであったが、ベルソールはすでに、

新聞はこのことを絶賛した。この流行が当分の間、火事の際に最初に天皇の写真を救いだすことを強いることになっても、驚くにはあたらないだろう。(p.20)

と述べている。最終的にベルソールはこの事件を、

この教師もまた、寺院の仁王像と同様にグロテスクである。しかし彼のイメージは、仁王像と同様に、聖域を探索する人々に道を指し示すことができる。(p.21)

と評する。

Ⅲ. ベルソールの日本人観

『日本の昼と夜』の第2章で、ベルソールは京都を訪れる。「京都の悦楽」(Les Enchantements Kyôto)と題されるこの章以降、ベルソールは独自の日本人観を展開してゆく。

ベルソールはある日、京都の茶屋で若い女教師に引率されて神社の参拝に出掛ける女生徒の一行に出会う。一行が通りすぎた後、一人の老人の姿が見え、次のようにつぶやく。

「ああ、若い日の輝きよ、お前はどうなってしまったのか。お前は私を、見も知らぬ老人にってしまった。」

“O fleur de la jeunesse qu'es-tu devenue ? Tu m'as laissé à un vieillard que je ne connais pas !” (p.30)

この老人が実際に存在したものか、あるいはベルソールが脚色したものかはわからないが、ベルソールは次のように続ける。

商人、職人、没落貴族、僧侶、巡礼者、乞食—すべてが神と死者の永遠の若さを少し分ち持っている。彼らの老いは、様相を変えて引き伸ばされた青年期なのだ。(pp.33-4)

ベルソールは京都という都市自体をこの老人になぞらえる。つまり「京都」も、自ら気の付かぬうちに老いてしまったというのだ。ベルソールはさらに、

西洋から獲得したものは、この老朽化した街の入り口でためらっている。(p.31)

という。

次にベルソールは、京都市内の社寺を見学に訪れる学校生徒たちを観察する。ベルソールが眼にするのは、埃で灰色に汚れたサンダルをひこずり、何人かは和服を何人かは古い洋服をきた学校生徒の一群(bandes de collégiens)である。一目見たところでは、彼らの無骨な容貌には、ただ強靱な注意力の他には、喜びも、驚きも、疲れも表れていない。ベルソールは、彼らと同行したときには、彼らについて行くことにしているという。彼らは、不謬の洞察力を持っていて、魅力的なものや珍しいものの前では、確実に足を止めるからだという。そしてベルソールは静岡では、もっと小さい年令のこどもたちを観察していた。

一般的に、ヨーロッパの人間は、学校の校門が開く時間に、児童たちの通学路に居合わせないのが望ましい。というのも彼らの教師は、彼らに白色人種に対する、勿体ぶった反感を植え付けているからだ。(p.8)

このような状況では、西洋人は児童から罵りのことばを浴びせられるだろうという。こんな時には、その中の一人に道を尋ねたり、その場所の名前を聞くのが得策であるとベルソールはいう。児童はすぐにほほ笑みを浮かべ、お辞儀をし、彼の友人たちも集まってきて愛想をふりまきはじめる。ベ

ルソールはそれを、「たばこ屋はどこにありますか？」という単純な問いかけが、児童たちに親切と礼節の伝統を呼び覚まさせた (*réveillé toute une hérédité de complaisance et de courtoisie*) のでありその愛想は、彼らの父親が生活のなかの重要な掟としてきた (*leurs pères avaient fait la grande loi de la vie*) もの (p.8) であるという。

またある日ベルソールは舞子の舞踊を見物する。ベルソールは舞子の演技にうっとりして次のようにいう。

ヨーロッパの大使館のサロンや万国博覧会などで、この「舞踊」を見た人は、パロディを知ったに過ぎない。

他のヨーロッパ人の存在を感じたり、鏡が私自身の姿を映していたら、それは私の恍惚を碎くのに十分だと思う。(p.46)

ベルソールは京都という、「様相を変え引き伸ばされた青年期」の「老いた」街のなかで、ヨーロッパ的なものを完全に排除した空間での舞子の舞踊を満喫する。この空間では、西洋人である自分自身の姿でさえ、彼の恍惚を打ち砕いてしまうというのだ。

ベルソールは日清戦争が終わったときに、京都市でその戦利品が公開されたことを述べる。実際、それらは大したものではなかったのだが、京都に住む貧しい者たちさえも、最も豊かな人々にしている宝に比べたら、それらは平凡以下の価値しか持たなかったのだと声明する。

さらにベルソールは、ひとつのエピソードを加えることで、京都の住人の京都に対する愛情を紹介する。それはある日、ベルソールの隣人の下駄職人が生まれただけの6人めの子供を亡くしたが、職人は、その子が京都に暮らすという幸せを知る事無く逝ってしまったことを不憫に思い、その遺体を背負ったまま市内を散策したのちに、墓地へ向かったというものである。ベルソールはその逸話を次のように論評する。

彼は、彼の街の素晴らしい所、つまり社寺の木陰や、神仏の微笑みの中 (*dans l'ombre des sanctuaires et dans le sourire des dieux.*) を連れて廻った後でなければ、この小さな遺体と別れることができなかったのだ。(p.57)

次にベルソールは、大阪の精神病院 (*Petites-Maisons*) を訪れる。最初にベルソールが気付いたのは、そこの患者達の礼儀正しさだった。ベルソールはそれを、

おそらく日本の礼節の規律が、患者の中に残っていて、それが鬱病患者や誇大妄想患者の脳

に作用しているのだろう。誰一人として、我々に対してお辞儀をし、微笑みかけるといふ道德的義務を怠らなかったのだ。これが私の気の付いた、白色人種の患者と黄色人種の患者との間の、唯一の相違点である。(p.92)

と述べる。

後述のように、ベルソールはこの病院には一定の評価を加えるが、社会的弱者に対する日本人の一般的な対応については批判的である。ベルソールは熊本を訪れた際、癲病患者が靈験を求めて集まるという本妙寺に出掛けた。同時にフランス人宣教師コール (*Corre*) と、イギリスのプロテスタントたちがそれぞれ造った二つの癲病院にも立ち寄る。このときベルソールは次のような感想を持つ。

(日本人の僧侶や信者たちには、) イギリスのプロテスタントやフランスのカトリックがしているような活動を行なおうとする心がないのだろうか。

私が滞在したどんな街でも、献身と自己犠牲に関する本当の話を開かなかったところはない。しかしその思いやりが向けられるのは、親や、親戚や、隣人や、同じ領主の旧家臣同士、同じ徒党の仲間に対してだけなのである。知らない相手の苦痛は、日本人の気持ちにほとんど働きかけないようだ。(p.187)

IV. ベルソールの見た日本における「西洋」の受容

ベルソールは京都から広島へと下り、関門海峡から九州に入った。先述のように、ベルソールは九州を、長崎―鹿児島―熊本―大牟田と廻るが、特徴的なのは九州全体を「薩摩の島」と呼んでいる (*La grande ile de Kiushu, l'île des Satsuma*) ことである。ベルソール自身は、西南戦争について興味を持っていたらしく、西南戦争をめぐる記述が何度か現れる。

ベルソールが最初に記述するのは、長崎の住民についてである。なおベルソールの記述には、長崎の「イサナ山」 (*la colline de Isana*) との地名が見える。先述の久保氏の訳でもそのままにしてあるが、これはベルソールが「イナサ山 (稲佐山)」をスペルミスしたものと考えられる。

長崎の人々は、早くから我々西洋人を知っていたが、それ以上に我々を好んでいたわけではなかった。しかし、西洋の商船や戦艦の来航は、彼らに微妙な金銭ずくの気質を発達させた。

(中略)

私は、非常に日本的(japonaise)な都市で、あまりに日本的でない住民にうんざりして、最初の散歩から帰った。(pp.133-4)

さらにベルソールは、長崎のある老人から話を聞く。老人は自らが見聞きした話と、人から聞いた話とをおり混ぜて、西洋人の奴隷売買のことを話す。かつて来日したオランダ船の士官は、奴隷を殴りクーリー(苦力)を奴隷のように扱っていた。それを見たある日本人は、17世紀の宣教師に向かって、こんな恥じるべき熱狂に身を委ねるために、キリスト教になるべきなのかどうか尋ねたという。この老人は、ベルソールにいう。

「あの頃からいうと、(西洋の)皆さんは進歩したと思います」

このことばを受けて、ベルソールは皮肉をこめて次のようにいう。

これは、我々(西洋人)が日本人を誉めるときにしばしば口にするのである。(p.144)

ここでベルソールは、日本が古来から持っていた独自のメンタリティーや美德を再評価する。だが西洋の船舶の来航によって、そのメンタリティーを変質させてしまった長崎の住民にベルソールは失望する。そしてキリスト教を含めた西洋の文物が日本を啓蒙するということが、必ずしも絶対的なものではなく、またそれを絶対視することを西洋人の傲慢と見て取る。しかしベルソールは、西洋の近代的合理性自体を否定しはしない。それは、鹿児島学校教育の現場を見学した感想の中で表明される。ベルソールは、鹿児島で多くの学校を精力的に見学し、次のような感想を述べる。

西郷の私学校は無くなった。他方で官立その他の学校は増加し、この地方で680校は下らない。また鹿児島では生活費が高くないので学生が詰めかけてくる。(中略)

ここ鹿児島では、私が墓地から外出するのは、決まって学校を訪問するときである。私は高等学校(Écoles secondaires Supérieures)の陸上競技や、農学校(École Agriculture)の卒業式に見学に出かけた。また商業学校(École Commerciale)では、若い生徒たちが架空の食料品を取引するところを見た。(中略)物理学や、極めて新しい学問だが、非常に古い土砂の堆積への執拗な興味をすでに保持している博物学の教室も回った。また教育計画の説明も受けた。中国の古代からエドワード7世の時代まで、人間の精神のあらゆる発明と概念がここで教えられている。女性たちもまた、この科学の浪費

(prodigalité de science)に参加している。男性教師、女性教師ともに、師範学校(École Normale)の同じ講義を受けている。技芸学校(École Industrielle)には、旧士族、平民の子女500名が在学し、機織、刺繍、裁縫、染色、造花製作、のほか、オランダの家事の清潔さをもって、化学実験室で食物科学を習っている。

(中略)

これらの学校を訪問するうちに、私のなかで尊敬と賞賛の念が増大していった。私は、これらの学校が皮相的で、不完全で、うぬぼれていて、一貫性の無いことは見逃さなかった。しかし私は、日本の端っこ、ヨーロッパの思想に最も接触しにくい帝国の一地方で、そして傲慢な敗者のこの街で、統一された容貌を持つ住民が、北からの征服者と同じような足取りで歩き、昨日嫌悪していたものを、今日ほとんど自慢げに受け入れて、外国の同じ規律に従っているとは思ってもみなかったのだ。(中略)

鹿児島島の光景は、(中略)日本の民衆のしなやかな生命力とたくましさをはっきりと示しているように思えた。(pp.157-9)

次にベルソールは、旧士族の教育を次のように観察する。

西郷の私塾(École Privées de Saïgo)、薩摩精神が宣揚されたあの有名な学校は、かなり変わった様式で改変された。この街には政府から完全に独立した10の「社」あるいは地区学校がある。

(中略)

彼らは、ヨーロッパの思想や方法を吸収しなければ、国力の面でも名誉においても日本は発展しないと通告されている。(中略)彼らの愛国的な誇りは、彼らの武士としての自尊心をほとんど消滅させた。彼らは、やがては我々西洋人の教師になるのだという素朴な思いをもって、我々の生徒となることを受け入れたのだ。(pp.160-1)

日本が西洋の援助を受けた後で、独自のものを作り出してゆくということについては、ベルソールは8月3日から訪れた札幌で次のように言及している。

入植者の不足と彼らの未熟さのため、初期の産業の指導をアメリカ人に任せなければならなかったこの行政都市では、工場や製紙場の責任者にもはや一人の外国人も残っていない。20年足らずの間に、日本の生徒は、アメリカの教師を送り返しうるほどに力をつけたと自ら判断し

たのだ。(p.238)

さらにベルソールは、先にあげた精神病院の日本人院長から次のような説明を受けていた。

「我々日本人は、あなたがたヨーロッパの方々の生徒にしか過ぎません。もし私が、あなたがたのもたらし下さったものを全部は評価していないにしても、あなたがたが、科学と、我々の欠陥を軽減するための方法を我々に示してくださったことには深く感謝しています。」

(p.90)

ベルソールをこの精神病院へ案内したヨーロッパ人の弁理公使は、次のように説明する。

「あなたがご存じの日本人たちなら、あなたをこのような施設にお連れしようなどとは考えなかったでしょう。かれらは県の退屈な事務所や、商業資料館や、造幣局などにお連れしたがるでしょう。それらは彼らが誇りにし、我々西洋のものに匹敵し得る施設なのです。しかし興味深いのは、日本に西洋風のレンガ造りの建築やフロックコートを着た役人が存在するのを確認することではなくて、日本の形式に調和的に適合された西洋の思想を発見することなのです。

(中略)

綿密に研究され理解されたヨーロッパの方法が、日本人の器用さや巧妙さでもって、緩和され練り直されて適用されたこの病院は、日本人が西洋のものを真面目に獲得し、また一つの枠組みの変わらぬ外観の下で、彼らの精神がどれだけ変化したかということを、政府の施設よりもっと明確に、あなたにお示ししていますのです。

彼らは、西洋を模倣することにはもはや満足しておらず、方法を変え始めているのです。

日本が、完全にこの精神病院のようになった時には、日本は本当に大国になるでしょう。」

(pp.94-5)

ベルソールはこれを弁理公使が話したことばとして記述しているが、前後の文脈からみて、これが彼自身の意見の表明であることは明らかである。その後、とくに第二次世界対戦後の日本の産業が、欧米の科学技術を日本独自の形態にアレンジすることで発展していったことを思い起こすとき、1897年のベルソールのこの指摘は、的確なものであったといえよう。

ベルソールが、長崎の住民の話聞き、鹿児島と、札幌の工場と、大阪の精神病院とを訪れて感じたのは、「西洋」を移入しようとして、様々な葛藤と苦闘し、それを独自のやり方で乗り

越えようとする日本の姿であった。ベルソールはそれを、政府の政策などではなく、自身と等身大の一般の日本人の姿の中に見ようとしたのである。

次にベルソールが強い興味をもって見聞し、『日本の昼と夜』の中でも、多くのページを割いて記述したのは、アイヌの生活文化についてであった。アイヌについては、すでに17世紀から、イエズス会宣教師らによっていくつかの報告がなされていた。さらに幕末明治期にいたるまで、アイヌについては多くのヨーロッパ人が関心をもって調査研究を行なっている。例えば、幕末期にパリ外国宣教師会から来日した宣教師メルメ・カション (Mermet Cachon) は、自身が箱館に居住して居たときの取材を元に、1863年に『アイヌ』(“Les Aïnos”) をパリで出版している。また先述の第一回国際東洋学会議では、1873年9月3日の第6部会で、フランスのデュシャトー (Duchateau) とレオン・ド・ロニ (Léon de Rosny) とが「アイヌについて：蝦夷の島国性と Kluriles の島々」という題目で、またオーストリアのフィッツメイヤー (Pfitzmaier) が「アイヌ語注解」という題目で、それぞれ研究発表している¹⁰⁾。

ベルソールもまた、アイヌに関する先行研究に眼を通していたものと考えられるが、ベルソールは自ら北海道を訪れ、アイヌの歴史、アイヌ人の容貌、衣食住の生活習慣、熊への信仰、伝統的な祭りなどを実際に取材して、それを書き留めてゆく。

アイヌについてほとんど知られていない。町や、山や、海岸の名前からは、アイヌ人がかつて、群島(北東島嶼部を含む、北海道全域の意か)に分散していたと推測し得る。征服者たちは、アイヌをまるで動物の群れのようにして追い払ったのだ。現在アイヌは17,000から18,000人しかいない。これからは、蝦夷の森のなかでアイヌに出会うことが、函館の路上で熊に出会うのと同様に困難になってゆくものと予想される。焼酎によって殺されなかった者達も、これからは、ヨーロッパの古着の下に姿を消してしまうことになるだろう。(pp.221-2)

V. 日本の中のヨーロッパ

ベルソールは、京都のカトリック教会に、何度かオーリアンティス (Aurientis) 神父を訪ねる。オーリアンティスは、キリスト教徒であるか仏教徒であるかを問わず、近隣の日本人を集めてフランス語の教室を開いていた。ベルソールは、その

フランス語授業の様子を聞きながら、フランス語を媒介とした日仏の異文化接触の有りようを考察する。

かううじて発音される単純なフレーズは、このエキゾチックな環境の中で、私の故国や遠い昔の生活情景を思い起こさせる。教師が単語の意味を説明するにつれて、情景がはっきりしてくる。しかし、生徒の質問を聞くと、我々がお互いにいかに離れているか、そしてこの初級の貧弱な教科書に、外国の精神が吸収し得ない本質が隠されているということを認めざるを得ない。

「それは祭りの前日のことだった。母はバタータルトを作り、それをオープンに入れた。もう木馬は届き、広場に据えられ始めた・・・」

“C’était la veille de la fête. La mère fit une tartelette au beurre, la mit dans le four: déjà les chevaux de bois étaient arrivés et commençaient à s’installer sur la place...”

この短いフレーズはそんなに悪くはない。そしてこんなフレーズは、フランスでは私に何も語りかけはしない。しかし、祖国から5千里離れた日本で、仏教風の庭園を眼前にして、日本人の口から発せられるのを聞いていると、このフレーズが単に訳読が難しいというだけでなく、香りとか、風味とか、思い出に富んだものに思えてくるのだ。オープン、バター、木馬、広場：いずれも、日本人には漠然として空虚な言葉である。最終的に、日本人はそれがどんなものなのか理解するだろう。それを描いた絵やスケッチを見せられて。しかしその後は？
(pp.59-60)

ベルソールは、これらの言葉が、日本人には何らの具体的な情感をもって認識されることはないだろうと指摘する。そして日本人にとってとくに理解しにくいのは、例えばヨーロッパの「広場」(place)という概念だろうという。ベルソールの考えるヨーロッパの広場とは、教会を中心に拡がり、民家を取り囲む場所である。そしてそこに人々が集まり、意見を交換し、彼ら自身や町の出来事について話し、週に一度、日曜日に集う場所である。一方、日本の町では小さな家が道の両側に等間隔に並び、寺院も散在しているので、住民のつながりができないという。ベルソールは、

もし、教科書が、西洋と極東との間の、非常に多くの社会的相違を我々に示しているにしても、生活の最も日常的な場面については何と記述しているのだろうか。(p.61)

と疑問を投げかける。ベルソールが指摘するのは、外国語に接触する場合に、外国語の単語を単に母語に置き換えるだけでなく、その単語の文化的背景を知らなければならないということである。ベルソールは、京都のフランス語教室を垣間見ること、異文化理解のこの本質的な課題に突き当たったのである。さらにベルソールは、京都の後に訪れた広島で、より深刻な異文化葛藤の実例に遭遇する。

ベルソールは広島で、フランス人を妻に持つある県庁職員を訪れる。そしてその夫人を見たとき、ベルソールは次のような感想を持つ。

私達の眼には同じ風景が映っていたのであり、子供の頃私達の唇は同じ音節を吃って発音したのであり、私達の精神は、同じ暖炉の前で形づくられたのであり、いくつかの単語は、それが誇らしいものであれつらいものであれ、我々に同じ記憶を呼び覚ますのだ。通りとか、ホテルとか、汽船の上とか、あるいはヨーロッパ人の家でなら、私は彼女にはほとんど注目しなかっただろう。しかしまったく異国のこの家の中では、彼女は私に醜悪な小人に見張られている漂着物のような印象を与え、私は本能的に彼女の味方になった。(pp.115-6)

ベルソールの見るところ、このフランス人夫人は、かなりの異文化葛藤を起こしていた。この県庁職員は、渡欧中にはとてもやさしく、彼女には素晴らしい男に思えた。しかし二人が結婚し、日本に着くやいなや、夫は暴君に変わり、この夫人は姑や彼の姉妹の憎しみのこもった視線にさらされながら生活することとなったというのだ。ベルソールはその状況を次のように分析する。

日本の生活における礼儀作法は、こみ入って綿密であり、私には魅力的に見える。しかし自主性と独立を重んじる風土の中で育った若い女性には、それはひどく侮辱的に思えるだろう。型式も儀式も、すべてが彼女に、自身の劣等的状況を示すのだ。日本の男性の妻となったものは、その劣等的状態を静かに受け入れるか、あるいはとても強い態度で彼女の革命的個人主義(individualisme révolutionnaire)を示し、周囲の者たちに受け入れさせなければならない。
(p.112)

VI. 結語

ベルソールは、来日して『日本の昼と夜』を著すにあたり、かつて渡日した先達の、日本につい

ての著作を研究したことを表明している。ベルソールが研究したのは、ケンペル (Engerbert Kämpfer)、シーボルト (P. Franz van Siebold)、ツンベルク (Torsten Thunberg)、シャルルボワ (P. de Charlevoix) などであった。ベルソールは、それら先達の日本論を次のように評価していた。

私は彼らの著作にあたるたびに、彼らの情報の豊かさと、知性の確かさとを賞賛せざるをえない。人種についての優越あるいは劣等の観念が、彼らの判断を混乱させるようなことはなかった。彼らは、傲慢な無関心や、あるいはより高慢な好事家の感傷でもって、外国人を観察することは決してしなかったのだ。

彼らの二つ折の著作の中には、ある種の科学的探求心と、自身から離れて他の存在を理解したいという渴望とを感じるができる。彼らが、苦勞して危険を冒してこれらの貴重な資料を集めたのだという感慨なしには、「出島」に足を踏み入れることはできない。(pp.141-2)

ベルソール自身も、彼らと同じような眼で日本を見ようとしたものと考えられる。もちろん、ベルソールの見た日本の事情は、これら先達の時代とはかなり異なっていた。「日本」それ自体を単独に調査・研究の対象とし、いまだ知られていない「日本」を、西洋に啓蒙的に紹介する時代ではもはやなかった。ベルソールの来日したのは、すでに日本の中に「西洋」的ものが定着し、それが日本独自の形に変容されつつある時代だったからである。ベルソールは日本国内を旅行し、一般の日本人と触れてみることで、それを調査しようとしたのである。しかし、ベルソール自身も、人種的偏見や特定のステレオタイプから完全には自由になれなかったことを告白している。例えば、先述のフランス人婦人と結婚した日本人家庭に出かけた際に、ベルソールはその家庭を日本独自の封建的なものとみなす先入観から自由になれず、本能的にそのフランス人婦人を擁護する立場に立ってしまう。日本人のしきたりや規律に興味を持ち、京都にあってはそれが廃れることを残念がったベルソールも、同胞がそのしきたりの中で苦悩している姿を見ると、自らの客観的な判断力を失ってしまうのである。また、京都の芝居小屋を訪れ

た際には、「どこか太平洋の島 (île de Pacifique) から来た未開人 (sauvages)」の芸を見て、「会場の日本人が、客席でただ一人の外国人である自分と彼らとのあいだに、自分にとって不愉快な比較をするのではないか」と懸念する。日本人を偏見なしに見ようとする意識が、逆に日本人以外の駐日外国人に対する偏見を際立たせてしまうのである。さらにベルソールは、京都で舞子の舞踊を見るときに、他の欧米人の同席を嫌い、また自分自身がフランス人であることすら忘れたいと願う。ベルソールは、自らが見付けた日本美の魅力が、純粋に伝統的な空間の中でのみ演じられることを願っているのである。ここには日本の伝統的文化に対する、ベルソールの若干屈折した心理が吐露されているように思われる。

はじめに述べたように、ベルソールが関心を持ち、日本観察の命題としたのは、西洋の文化を移入して伝統文化と融合させようとする葛藤する日本の姿であった。『日本の昼と夜』が興味深いのは、ベルソール自身が、日本に対して客観的な考察をしようとしながら、自己のなかでも異文化葛藤を起こしていることである。

これまで、外国人が著した日本論を研究することは、日本人自身が、外からどう見られていたのかを検証し、日本人が自身を知るために意義があるのだとの見解が大勢であった。しかし、過去の来日外国人の日本論には、日本で生活しながら日本理解に努力し、異文化間葛藤に苦慮している現在の駐日・在日外国人にとっても有益な示唆が多く含まれているように思われる。過去の日本研究者の視点は、現在の日本に居住する外国人が日本を知るための大きな助けとなる。そして過去の日本人論を繙くことで、自身が接触する日本や日本人の特性が、現在に固有のものなのか、あるいは過去から連綿と引き継がれてきた永続的なものなのかを判断し、それぞれのケースに応じた異文化葛藤克服の戦略を考えることができるからである。とくにベルソールの著作のように、日本人との直接の接触から日本を論じ、また自身が経験した異文化葛藤をも告白している日本論は、日本に居住する外国人にとって、すぐれたテキストになると思われる。

註

- 1) 小林善彦「ヨーロッパ人が見た日本——六世紀から一八世紀まで——」(中川久定編『ディドロ, 18世紀のヨーロッパと日本』岩波書店, 1991年) 186—7頁, 参看。
- 2) 第一回国際東洋学会議については, 拙稿「1873年第一回パリ東洋学会議における日本研究—マディエ・ド・モンジョの発表を中心として—」(広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』第13巻, 1987年) 参照。
- 3) 明治初年以降, とくにお雇い外国人などの在日外国人には, 居住地や, 国内の旅行移動などにいくつかの制約があった。外国人居留地外の居住と国内旅行に関する規定が失効したのは, 1899(明治32)年のことであった。なお明治期の在日お雇い外国人の雇用規定, 駐日外国人の行動の制約等については, 拙稿「明治初期お雇い外国人の雇用規定に関する考察」(『広島大学教育学部紀要』第2部第37号, 1988年) 参照。
- 4) 20世紀ラルース百科事典“*Larousse de XX^e Siècle; Tome Premier*”およびキレ百科事典“*Dictionnaire Encyclopédique Quillet, A-Chas*” 1961によると, ベルソールは1866年にフランスのマイエンヌ(Mayenne)県ラヴァル(Laval)で生まれ, 1942年パリで亡くなった。文学の中・高等教育教授資格(agrégation des lettres)を持ち, 古代ローマ詩人ウェルギリウス(Virgile)やギリシャ劇に関する批評, 翻訳, 評論活動で知られた作家であった。1935年にはアカデミーフランセーズ(Académie Française)の終身書記長となった。外国についての著作には, 『日本の昼と夜』のほか, 『新しいアメリカ: チリとボリビア (*Jeune Amérique: Chili et Bolivie*)』1897, 『セイロンからフィリピンへ (*De Ceylan aux Philippines*)』1899, 『日本の社会 (*Société japonaise*)』1902, 『現代のルーマニア (*Roumanie contemporaine*)』1905, 『スウェーデン (*Suède*)』1910, 『新しい日本 (*Nouveau Japon*)』1915, 『大戦開始期の極東における一フランス人 (*Un Français en extrême Orient au début de la guerre*)』1916, 『古いアメリカの輝き (*Reflets de la la vieille Amérique*)』1922などがある。
- 5) 永井壮吉「断腸亭日乗 昭和十一年」(『荷風全集』第22巻, 岩波書店, 1963年), 33頁。
永井は, この日記に次のように記している。
「三月十日。晴。風邪下痢終日家に在り。佛人アンドレエ, ベレソール著日本日夜の記をよむ。日本人の微笑につきて曰く, 若し日本人にして微笑の習慣を失いたりとせんか, 其顔貌は野蛮粗暴実に厭うべしものとなるべし。(中略)
これと同じく日本の都市より寺院の美観を取り去りなば残るものは倭屋と廃舎との形を成さざる集合のみとなるべし 京都に至る途中の記二十七頁云々。これ平常余の見る所と一致せり。
André Bellesort: *Les Journées et les nuits Japonaises* (1926)」
- 6) A・ベルソール著, 大久保昭男訳『明治滞在日記』新人物往来社, 1989年。
- 7) André Bellesort “*Les Journées et Les Nuits Japonaises*” Librairie Académique Didier, 1926。
なお, 飯田がフランス国立図書館(La Bibliothèque Nationale)で確認したところでは, 本書の初版は1906年に刊行されている。
- 8) 中野好夫編『明治文学全集48 小泉八雲集』筑摩書房, 1970年, 252頁。
- 9) 佐藤秀夫『学校ことはじめ事典』小学館, 1987年, 55頁。
- 10) “*Congrès International des Orientalistes. Comete-rendu du la Première Session*”, Paris-1873. Paris, Maisonneuve et Cie, 1874. 参看。なお内容については, 前掲拙稿2) 参照。